明石の史跡（８）新町の「鼠捕り商」

幕藩体制下の諸人は、「入鉄砲出女」という箱根の関所のイメージからも、旅の困難さを想像してきた。ところが行商人などは、かなり自在に他国を往来しているのである。

たとえば、文化１５年（１８１８）３月から１年間、広島県尾道市のある町に提出された宿泊願からは、職人をふくむ行商人の活動範囲がわかる。こころみに播磨関係分のみ抽出してみよう（新修尾道市史４／深井甚三著『江戸の旅人たち』４２頁ー３）。

呉服行商（赤穂・魚崎）	反物商（京都・広島・高砂）
目鏡おさ商（高砂）	剃刀磨石商（高砂）
植木商（播磨・池田）	筆墨商（西条）
□目かね商（赤穂）	目鑑糸もの商（津方村・高砂）
小道具類（加古川）	鼠捕り商（明石新町）

これらの商・職人達は、１年間の宿泊を願い出ているところからも、たんなる商品の販売のみならず、技術指導も含まれていたと考えなければならないだろう。

注目すべきは、明石新町から出向いている「鼠捕り商」の存在である。延宝６年（１６７８）の「町中小名之定」には、東西の新町が見える（明石御代々御城主様御入国并町割年号記）。明石新町とあるだけでは、いずれの新町か即断はできない。この鼠捕り商が、相手方から招かれたのか、はたまた自主的に出向いたかは、これまた不明である。前年（文化１４）には、畿内から九州にかけての地域に蝗害が発生しており（近世生活史年表）大量発生すれば、１日に４～５町もの穀物類の被害が報告され（本朝諸社霊験記）、鼠にもその影響が及んだのかも知れない。

日本歴史学会会員 茨木 一成